

「李徴」の変容

―「人虎伝」本文の生成に関する覚書―

坂口三樹

はじめに

中島敦の小説「山月記」が、唐代の小説「人虎伝」に取材していることはよく知られているが、その「人虎伝」には、実は二つの系統のテキストが存在する。一つは北宋・李昉等撰『太平広記』巻四二七「虎二」に「李徴」と題して収めるもので、いま一つは明・陸楫編『古今説海』説淵部・別伝家・壬集や、清・陳世熙（蓮塘居士）輯『唐人説薈』巻二十『唐代叢書』六集）に「人虎伝」の題で見えているものである。⁽¹⁾この両者では、単に題名が異なるのみならず、作者についても相違が見られる。すなわち、『太平広記』ではこの話の出典に『宣室志』（晩唐・張讀撰）を挙げているのに対し、『唐人説薈』では作者を中唐の李景亮としているのである（『古今説海』は作者名を欠く）。

しかし、相違はそれのみにとどまらない。さらに重要な

のは、後者には、話の筋立ての上で看過できない何箇所かの加筆が認められることである。詳細は次章以下に譲るが、今その概要を示せば、次のようにまとめられよう。

I、虎となった李徴と旧友袁修との再会の場面における袁修の発話。

II、李徴が虎となつてから人間を襲うようになるまでの様子。

III、袁修が虎の李徴に食物を贈ろうと申し出るくんだり。

IV、虎の李徴が即興で詩を作るくんだり。

V、李徴が虎となった原因を告白するくんだり。

VI、李徴が、袁修に帰路はここを通らぬよう忠告し、別れに臨んで虎となった己の姿を見せるくんだり。

このような著しい異同を含む二つのテキストの関係については、すでに今村与志雄に指摘がある。⁽²⁾今村は、宋・羅燁『醉翁談録』甲集巻一「小説開闢」に話本として「人虎

伝」の名が見えること、さらに清・東魯古狂生『醉醒石』の第六回到「高才生傲世失原形 義氣友念孤分半俸」と題する話本テキストが存在することを根拠として、「人虎伝」は明清の文人が話本をもとに加筆してなつたのではないかと推測している。おおむね首肯される説であらう。

本稿では、こうした関係にある「李徴」と「人虎伝」の本文を、特にその異同箇所焦點を当てて比較検討することとで、「人虎伝」の小説としての成熟の様相について検証する。あわせて「人虎伝」本文の生成過程についても、聊かの考察を加えてみたい。

なお、本文の引用にあたっては、「李徴」には汪紹楹点校『太平広記』（中華書局、一九六一）を、「人虎伝」には清・嘉慶十一年（一八〇一）弁山楼刻本影印『唐代叢書』（新興書局、一九七二）をそれぞれ底本として用いた。

一、発話の増加と袁孝の人物造型

「李徴」と「人虎伝」の本文を比較してまず気づくのは、袁孝の発話の大幅な増加である。先に示した異同部分の概要でいえば、IとIIIがそれに当たる。まず、Iの部分に次に掲げよう。

I 「李徴」

遂問曰、「子爲誰。得非故人隴西子乎。」虎呻吟數聲、若嗟泣之狀。已而謂孝曰、「我李徴也。君幸少留、與我一語。」孝卽降騎、因問曰、「李君、李君、何爲而至是也。」

遂に問ひて曰く、「子は誰とか爲す。故人の隴西子に非ざるを得んか。」と。虎呻吟すること數聲、嗟泣の狀のごとし。已にして孝に謂ひて曰はく、「我は李徴なり。君幸はくは少く留まり、我と一たび語らんことを。」と。孝即ち騎より降り、因りて問ひて曰はく、「李君、李君、何爲れぞ是に至れるや。」と。

「人虎伝」

遂問曰、「子爲誰。豈非故人隴西子乎。」虎呼吟數聲、若嗟泣之狀。已而謂孝曰、「我李徴也。」孝乃下馬曰、「君何由至此。且孝始與君同場屋十餘年、情好歡甚、愈於他友。不意吾先登仕路。君亦繼捷科選。瞬間言笑、歷時頗久。傾風結想、如渴待飲。幸因出使、得此遇君。而乃自匿草中、豈故人疇昔之意也。」虎曰、「吾已爲異類。使君見吾形、則且畏怖而惡之矣。何假疇昔之念邪。雖然君無遽去、得少盡欵曲、乃我之幸也。」孝曰、「我素以兄事故人、願展拜禮。」乃再拜。

遂に問ひて曰はく、「子は誰とか爲す。豈に故人の隴

西子に非ずや。」と。虎呼吟すること数声、嗟泣のごとし。已にして慘に謂ひて曰はく、「我は李徴なり。」と。慘乃ち馬より下りて曰はく、「君何に由りてか此に至れる。且つ慘始めて君と場屋を同じくしてより十余年、情好欲することの甚だしきこと、他友に愈れり。意はざりき吾先づ仕路に登らんとは。君も亦た繼いで科選に捷つ。言笑を睽間し、時を歷ること頗る久し。傾風結想し、渴して飲を待つがごとし。幸ひに出でて使ひするに因り、此に君に遇ふを得たり。而るに乃ち自ら草中に匿る、豈に故人疇昔の意ならんや。」と。虎曰はく、「吾已に異類と爲る。君をして吾が形を見しめば、則ち且に畏怖して之を惡まんとす。何ぞ疇昔の念に仮あらんや。然りと雖も君遽かに去ることなく、少く歎曲を尽くすを得ば、乃ち吾の幸ひなり。」と。慘曰はく、「我素より兄を以て故人に事へたり。願はくは拝礼を展べん。」と。乃ち再拝す。

「李徴」では、「李君、李君、何爲而至是也。」とわずか十字に過ぎなかつた発言が、「人虎伝」では「且慘始與君同場屋十余年」以下の、二人の交友の深さを振り返つて姿を見せるよう李徴に促す言辞を加えて、七十六字にも増補されているが、つとに近藤春雄の指摘するように、この部

分は、「李徴」の後の箇所に見える次の文とほぼ同じ内容である（「」は「人虎伝」の異文）。

往者吾與執事同年成名、交契深密、異於常友。自聲容間阻、時去〔去日〕如流。想望風儀、心目俱斷。不意今日獲君念舊之言。雖然執事何爲不我見、而自匿於草莽〔木〕中。故人之分、豈當如是耶〔邪〕。

往者に吾と執事とは同年に名を成し、交契の深密なること、常友に異なれり。声容間阻してより、時の去くこと〔去日〕流るるがごとし。風儀を想望しては、心目俱に斷ゆ。意はざりき今日君が旧を念ふの言を獲んとは。然りと雖も執事何為れぞ我を見ずして、自ら草莽〔木〕の中に匿る。故人の分、豈に当に是くのごとくなるべけんや。

このように同じ内容が繰り返し現れることについて、近藤は「この作にとつて特に強調したいことであり、また、この作にとつて大事なことであつたに違いない」と述べているが、ではこの場合、強調したいこと・大事なことはいったい何であつたのか。おそらくそれは、袁慘の李徴に対する友情の深さを示すことであつたに違いない。そのことは、次のⅢの加筆部分からも裏付けられる。

Ⅲ「李徴」

修且問曰、「君今既爲異類、何尙能人言耶。」虎曰、「我今形變而心甚悟。故有揔突、以悚以恨、難盡道耳。幸故人念我、深恕我無狀之咎。亦其願也。……」

修且つ問ひて曰はく、「君今既に異類と爲る、何ぞ尙ほ人の言を能くするか。」と。虎曰はく、「我今形變するも心甚だ悟めたり。故に揔突有りしは、以て悚れ以て恨み、尽くは道ひ難きのみ。幸はくは故人我を念ひ、我が無狀の咎を深恕せられんことを。亦た其の願ひなり。……」と。）

「人虎伝」

修且問曰、「君今既爲異類、何尙能人言耶。」虎曰、「我今形變而心甚悟耳。自居此地、不知歲月多少、但見草木榮枯耳。近日絶無過客、久飢難堪。不幸唐突故人、慙惶殊甚。」修曰、「君久飢。某有餘馬一疋。留以爲贈、如何。」虎曰、「食吾故人之俊乘、何異傷吾故人乎。願無及此。」修曰、「食籃中有羊肉數斤。留以爲贈、可乎。」曰、「吾方與故人道舊、未暇食也。君去則留之。」修且つ問ひて曰はく、「君今既に異類と爲る、何ぞ尙ほ人の言を能くするか。」と。虎曰はく、「我今形變するも心甚だ悟むるのみ。此の地に居りてより、歲月の多少を知らず、但だ草木の榮枯するを見るのみ。近日

絶えて過客無く、久しく飢ゑて堪へ難し。不幸にして故人に唐突す、慙惶殊に甚だし。」と。修曰はく、「君久しく飢う。某に余馬一疋有り。留めて以て贈るを爲すは、如何。」と。虎曰はく、「吾が故人の俊乘を食らふは、何ぞ吾が故人を傷つくるに異ならんや。願はくは此に及ぶ無からんことを。」と。修曰はく、「食籃の中に羊肉數斤有り。留めて以て贈るを爲さん、可ならんか。」と。曰はく、「吾方に故人と旧を道へば、未だ食らふに暇あらざるなり。君去るとき則ち之を留めよ。」と。

「人虎伝」において新たに加えられた、李徴に食物を贈るよう申し出るこのくだりには、旧友の身を案ずる袁修の心の動きが活写されている。とりわけ、最初に馬を贈ろうとし、辞退されると今度は羊肉を贈るよう申し出る場面では、相手の意向を尋ねる「如何」から許諾を求める「可乎」へと、問いかけの表現を微妙に変化させることで、袁修が自らの意向をより強く滲ませているように書き分け、旧友の窮状を何とか救おうと心を砕くその真摯な人柄を鮮やかに浮かび上がらせている。

以上のように見てくれば、「人虎伝」におけるⅠ・Ⅲの加筆部分とともに、虎となった友人に変わらぬ友情を抱き

続け、旧友の身を案ずる袁慆の誠実な人柄を示す発話として造型されていることは明らかであろう。「李徴」におけるⅠ・Ⅲの袁慆の発話が、ともすればシテに対するワキのごとく、虎となった李徴の身の上話を引き出すための役割しか果たしていなかったのに対し、「人虎伝」では右のような加筆によつて、友人思ひの袁慆の人柄を示す発話へと改められているのである。それによつて、「李徴」では受動的でやや個性の稀薄であつた袁慆の人物像が、誠実で友情に厚い人物として輪郭鮮やかに浮かび上がることとなつた。「人虎伝」におけるⅠ・Ⅲの発話部分の加筆は、袁慆の人物造型を際立たせる効果を發揮しているのであつた。

二 叙述の整序と描写の精細

次に、二つのテキストを比較して気づかれるのは、「人虎伝」における叙述が整理され、細部まで精しく描き込まれている点である。虎に変身し、やがて人を襲うようになるまでを語つたⅡがその例に当たる。

Ⅱ 「李徴」

及視其肱髀、則有釐毛生焉。又見冕衣而行於道者・負而奔者・翼而翱者・毳而馳者、則欲得而啗之。既至漢陰南、以饑腸所迫、值一人腴然其肌、因擒以咀之立盡。

由此率以爲常。

其の肱髀を視るに及びては、則ち釐毛の生ぜる有り。又冕衣して道に行く者・負ひて奔る者・翼ありて翱る者・毳ありて馳する者を見れば、則ち得て之を啗はんと欲す。既に漢陰の南に至り、饑腸の迫る所を以て、一人の腴然たる其の肌に値ひ、因りて擒へて以て之を咀ひて立ちどころに尽くす。此れより率ね以て常と爲す。

「人虎伝」

及視其肱髀、則有班毛生焉。心甚異之。既而臨溪照影、已成虎矣。悲慟良久。然尚不忍攫生物食也。既久飢不可忍、遂取山中鹿豕獐兔充食。又久諸獸皆遠避無所得、飢益甚。一日有婦人從山下過。時正餒迫、徘徊數四、不能自禁、遂取而食。殊覺甘美。今其首飾、猶在巖石之下也。自是見冕而乘者・徒而行者・負而趨者・翼而翱者・毳而馳者、力之所及、悉擒而咀之立盡、率以爲常。其の肱髀を視るに及びては、則ち班毛の生ぜる有り。心に甚だ之を異しむ。既にして溪に臨みて影を照らせば、已に虎と成れり。悲慟すること良久^{やう}し。然れども尚ほ生物を攫りて食らふに忍びざるなり。既に久しくして飢ゑて忍ぶべからざれば、遂に山中の鹿豕獐兔を

取りて食に充つ。又久しくして諸獸皆遠く避けて得る所無く、飢多益々甚だし。一日婦人の山下より過ぐる有り。時に正に饑多迫り、徘徊すること數四、自ら禁ずる能はず、遂に取りて食らふ。殊に甘美なるを覺ゆ。今其の首飾、猶ほ巖石の下に在るなり。是れより覺して乗る者・徒して行く者・負ひて趨る者・翼ありて翔る者・靄ありて馳する者を見れば、力の及ぶ所、悉く擒へて之を咀らひて立ちどころに尽くすを、率ね以て常と爲す。

「李徴」では、襲つたのはでつぷりと太った人であつたのが、「人虎伝」では通りかかった婦人に改変されているのも、兇行の残虐性を印象づける点で見逃せない相違点ではある。が、それよりも注目すべきは、「人虎伝」においては、その部分を含む前後の描写が精細になり、叙述が整えられている点であろう。「李徴」では、ひじやもにも毛が生えて虎となつた後は、人間であろうが動物や鳥であろうが見境なく襲おうとする。ところが「人虎伝」では、虎となつた当初は生き物さえ食うのをためらっているのである。それが、飢えのためにやがて山中の獸を食うようになり、それすらも手に入らなくなるとついに人間を襲つてしまふ。こうして一線を越えてしまつた後は、人であろうと

動物であろうと手当たりしだいに襲うようになったと、兇暴化していく様子が段階を踏んで克明に描かれており、その間の李徴の心理や内面の葛藤が浮かび上がる叙述となっている。加えて、谷川に姿を映して虎になつたことに氣づく場面や、婦人を襲う際の逡巡のさまなどの細部の描写が、この場面をより生彩のあるものにしてゐる。婦人の髪飾りが今なお岩かげに残ると語るくだりも、兇行の残虐さを印象づけて効果的である。こうした叙述の整序と細部の描写の加筆を経て、「人虎伝」の小説的興趣は格段に高まつたといえよう。

ところで、かかる加筆について、今村与志雄は先に見たごとく、話本「人虎伝」の影響を想定していたが、読者の興味を惹くこれら加筆部分のすべてが、説話人ないしは話本作者の独創にかかる趣向であつたかといへば、ことはそれほど単純ではない。というのも、『太平広記』巻四二六（四三三）に収める六朝から唐にかけての虎にまつわる説話の中には、「人虎伝」の加筆部分の成立に少なからぬ影響を与えたと思われる話が見出されるからである。例えば、『齊諧記』（南朝宋・東陽無疑撰）を出典とする「師道宣」には、次のような記述が見えてゐる。

……後忽發狂、變爲虎。食人不可紀。後有一女子樹上

探桑。虎取食之。竟、乃藏其釵釧於山石間。……〔太平
平広記〕卷四二六「虎一」

……後忽ち発狂し、変じて虎と為る。人を食らひて紀
むべからず。後一女子の樹上に桑を採る有り。虎取り
て之を食らふ。竟はるや、乃ち其の釵釧を山石の間に
藏す。……

これは、「人虎伝」の「今其首飾、猶有巖石之下也。」と
類似した記述として注目に値しよう。

また、『原化記』（唐・皇甫氏撰）を出典とする「南陽士
人」は、熱病に罹つた男が夜中に不思議な人物から文書を
受け取り、翌日、虎になってしまう話であるが、そこには
次のような記述が見られる。

……行一里餘、山下有澗。沿澗徐歩、忽于水中自見其
頭、已變爲虎。又觀手足皆虎矣。……此人爲虎、入山
兩日、覺飢餒。忽於水邊蹲踞、見水中科斗蟲數升。自念、
常聞虎亦食泥。遂掬食之、殊覺有味。又復徐行、乃見
一兔、遂擒之。應時而獲、即瞰之、覺身輕轉強。晝即
於深榛草中伏、夜即出行求食、亦數得麋兔等、遂轉爲
害物之心。忽尋樹上、見一採桑婦人。草間望之、又私
度、吾聞虎皆食人。試攫之、果獲焉。食之、果覺甘美。

……〔太平広記〕卷四三二「虎七」

……行くこと一里余り、山下に澗有り。澗に沿ひて徐
ろに歩し、忽ち水中に于いて自ら其の頭を見るに、已
に變じて虎と為れり。又手足を觀るに皆虎なり。……
此の人虎と為り、山に入りて兩日、飢餒を覺ゆ。忽
ち水辺に於いて蹲踞するに、水中の科斗虫數升を見る。
自ら念ふ、常に聞く虎亦た泥を食らふと。遂に掬ひて
之を食らふに、殊に味有るを覺ゆ。又復た徐ろに行く
に、乃ち一兔を見、遂に之を擒ふ。時に応じて獲、即
ち之を瞰ふに、身の軽くして転た強きを覺ゆ。昼は即
ち深き榛草の中に於いて伏し、夜は即ち出行して食を
求めては、亦た數々麋兔等を得、遂に転た物を害する
の心を為す。忽ち樹上を尋ぬるに、一の桑を採る婦人
を見る。草間より之を望み、又私かに度る、吾聞く虎
は皆人を食らふと。試みに之を攫むに、果たして獲た
り。之を食らふに、果たして甘美なるを覺ゆ。……

川面に映つた姿で虎となつたことを知る越向や、空腹
に迫られ、科斗虫おたふしやうから兎やのろ、そしてついには女性を
と、人間を襲うに至るまでの経緯が、段階を踏んでい
にエスカレートしていくように叙述されている点は、「人
虎伝」と酷似している。ここまで酷似した記述を、單
なる偶然の一致と見なすことは難しい。むしろこれらの先行

する説話に、「人虎伝」が学んだ結果と見るほうが自然な
のではあるまいか。おそらく「人虎伝」のⅡの加筆部分
は、こうした六朝から唐にかけての先行する説話群の中か
ら、読者の興味を惹くような記述や趣向を取り込むかたち
で生成されていったものであつたろう。

三、物語の起伏を生み出す工夫

次に、ⅣとⅥの加筆部分について検討しよう。まず、Ⅳ
の部分には次のごとくである。

Ⅳ「李徴」

虎曰、「此吾平生之素也。安敢望其傳乎。」

虎曰はく、「此れ吾が平生の素なり。安くんぞ敢へて
其の伝はるを望まんや。」と。

「人虎伝」

虎曰、「此吾平生之業也。又安得寢而不傳歟。」既又曰、
「吾欲爲詩一篇。蓋欲表吾外雖異、而中無所異。亦欲
以道吾懷、而攄吾憤也。」慘復命吏以筆授之。詩曰、「偶
因狂疾成殊類、災患相仍不可逃。今日爪牙誰敢敵、當
時聲跡共相高。我爲異物蓬茅下、君已乘軺氣勢豪。此
夕溪山對明月、不成長嘯但成嗥。」

虎曰はく、「此れ吾が平生の業なり。又安くんぞ寢め

て伝へざるを得んや。」と。既にして又曰はく、「吾詩
一篇を為らんと欲す。蓋し吾が外異なりと雖も、而も
中は異なる所無きを表さんと欲すればなり。亦た以て
吾が懷ひを道ひて、吾が憤りを攄べんと欲するなり。」
と。慘復た吏に命じて筆を以て之に授けしむ。詩に曰
はく、「偶々狂疾に因りて殊類と成り、災患相仍りて
逃るべからず。今日爪牙誰か敢へて敵せん、当時声跡
共に相高し。我は異物と爲る蓬茅の下、君は已に軺に
乗りて氣勢豪なり。此の夕べ溪山明月に對ひ、長嘯を
成さずして但だ嗥ゆるを成す。」と。

「李徴」では、詩の伝録を依頼した後、すぐに別れの場面
に移行するのに對し、「人虎伝」では現在の心境を即興の
詩にうたい、往年の才子ぶりを發揮するくだりが書き込ま
れている。おそらく即興での作詩に無理なくつなぐため
の工夫であろう、「李徴」では旧文に感嘆する哀慘に向か
つて「伝わることなど望みはしない。（安敢望其傳乎。）」
と謙遜の辞を述べていたのに對し、「人虎伝」では「その
ままにして伝えないではいられない。（又安得寢而不傳
歟。）」と自己の詩才への自負の念を滲ませる言葉に改変さ
れている。その自負の念が、次の即興の詩に現在の心境を
託すという行為への伏線となっているのである。

また、詩の内容そのものは、人間を襲ったことを述べた後に、それまで抑えていた感情を吐露した「嗟夫、我與君同年登第、交契素厚。〔君〕今日執天憲、耀親友。而我置身林藪、永謝人寰。躍而吁〔呼〕天、俛而泣地、身毀不用、是果命乎。〔嗟夫、我と君とは同年の登第にして、交契素より厚し。〔君は〕今日天憲を執り、親友に耀く。而るに我は身を林藪に匿し、永く人寰を謝す。躍りて天に吁き〔呼び〕、俛して地に泣くも、身毀れて用ゐられず、是れ果たして命なるかな。〕」(「」は「人虎伝」の異文)の言辭とほぼ同意といつてよいが、それを再び詩の形で表白させることで、苛酷な運命を甘受しなければならぬ李徴の内面が集約的に提示され、物語の抒情性を高める効果を果たしている。例えていえば、歌劇におけるアリアのごとき役割といつてよい。

そして、李徴の詩才を具体的に示すその詩を受けて、袁孝の「君之才行、我知之久矣。而君至於此者、君平生得無有自恨乎。(君の才行、我之を知ること久し。而も君此に至れるは、君平生自ら恨むこと有る無きを得んや。)」との問いが發せられ、Vの虎となつた原因の告白がなされることになる。それまでの話を受けて物語の抒情性を高め、その上で次なる展開を用意する巧みな詩の挿入といえよう。

VI 「李徴」

一方、VIの部分の異同は次のようになっている。

虎曰、「……幸故人念我、深恕我無狀之咎。亦其願也。然君自南方回車、我再值君、必當味其平生耳。此時視君之軀、猶吾機上一物。君亦宜嚴其警從以備之。無使成我之罪、取笑於士君子。」……又曰、「君銜命乘傳、當甚奔迫。今久留驛隸、兢悚萬端。與君永訣。異途之恨、何可言哉。」徴亦與之叙別、久而方去。

虎曰はく、「……幸はくは故人我を念ひ、我が無狀の咎を深恕せられんことを。亦た其の願ひなり。然れども君南方より車を回らし、我再び君に値はば、必ず当に其の平生に味かるべきのみ。此の時君の軀を視ば、猶ほ吾が機上の一物のごとからん。君も亦た宜しく其の警從を嚴にして以て之に備ふべし。我の罪を成さしめ、笑ひを士君子に取らしむること無かれ。」と。……又曰はく、「君は命を銜みて伝に乗る、当に甚だ奔迫すべし。今久しく驛隸を留めしは、兢悚万端なり。君と永訣せん。途を異にするの恨み、何ぞ言ふべけんや。」と。徴も亦た之れと別れを叙し、久しくして方めて去る。

「人虎伝」

虎又曰、「使回日、幸取道他郡、無再遊此途。吾今日尙悟、一日都醉、則君過此、吾既不省、將碎足下於齒牙間、終成士林之笑焉。此吾之切祝也。君前去百餘步、上小山下視盡見此。將令君見我焉。非欲矜勇、令君見而不復再過此。則知吾待故人之不薄也。」復曰、「君還都見吾友人妻子、慎無言今日之事。吾恐久留使旆稽滯王程。願與子訣。」叙別甚久。慘乃再拜上馬、回視草茅中、悲泣所不忍聞。慘亦大慟。行數里、登嶺看之、則虎自林中躍出咆哮、巖谷皆震。

虎又曰はく、「使ひして回る日、幸はくは道を他郡に取り、再び此の途に遊ぶこと無かれ。吾今日尚ほ悟むるも、一日都て酔はば、則ち君此を過ぐるも、吾既に省せず、將に足下を齒牙の間に碎かんとし、終に士林の笑ひを成さん。此れ吾の切祝なり。吾前み去ること百余歩、小山に上りて下視せば尽く此を見ん。將に君をして我を見しめんとす。勇を矜らんと欲するに非ず、君をして見て復た再び此を過ぎざらしめんとすればなり。則ち吾の故人を待することの薄からざるを知らん。」と。復た曰はく、「君都に還りて吾が友人妻子を見るも、慎みて今日の事を言ふこと無かれ。吾久しく使旆を留めて王程を稽滯するを恐る。願はくは子と

訣れん。」と。別れを叙すること甚だ久し。慘乃ち再拝して馬に上り、草茅の中を回視するに、悲泣聞くに忍びざる所あり。慘も亦た大いに慟く。行くこと數里、嶺に登りて之を看れば、則ち虎林中より躍り出でて跑

(咆) 哮し、巖谷皆震へり。

「李徴」で、南方からの帰路には警護を固めて自分が襲つたときのために備えてほしいとある助言が、「人虎伝」では帰路には他に道をととり、決してここを通らぬようにとの忠告に改められている点については、今は措く。ここで問題とすべきはそうした文言の相違ではなく、その発言の出てくる場所であるう。「李徴」では、旧友と気づかず飛びかかった無礼を詫びる言葉の後・妻子の世話と旧文の伝録の依頼の前に置かれていたその言葉が、「人虎伝」では別れの場面の直前に配されているのである。その上、李徴が別れに際して虎となつた己の姿を見せるといふ趣向を加えることで、旧友との今生の別れを決意した李徴の悲しみがくつきりと浮かび上がり、物語のクライマックスへと達する。物語の中間部にあつた発言を最後に移し、新たに加筆した趣向と連動させて巧みに山場を構成した、本文操作の妙といえよう。IV・VIの加筆によつて、やや平板・單調な感のあつた「李徴」の後半部は、起伏に富んだ物語へ

と成長を遂げたのであった。

四、中世的物語世界の変質

最後に、Vの異同部分について検討しよう。Vは、李徴が虎となった原因と思われる自身の非道の行いを告白する部分で、「李徴」には該当する箇所は見られない。次に「人虎伝」の本文のみを掲げる。

V「人虎伝」

倭覽之驚曰「君之才行、我知之久矣。而君至於此者、君平生得無有自恨乎。」虎曰、「二儀造物、固無親疎厚薄之間。若其所遇之時、所遭之數、吾又不知也。噫、顔子之不幸、冉有斯疾、尼父常深歎之矣。若反求其所自恨、則吾亦有之矣。不知定因此乎。吾遇故人、則無所自匿也。吾常記之。於南陽郊外嘗私一孀婦。其家竊知之、常有害我心。孀婦由是不得再合。吾因乘風縱火、一家數人盡焚殺之而去。此爲恨爾。」

倭之を覽て驚きて曰はく、「君の才行、我之を知るこ
と久し。而も君此に至れるは、君平生自ら恨むこと有
る無きを得んや。」と。虎曰はく、「二儀の物を造るや、
固より親疎厚薄の間無からん。其の遇ふ所の時、遭ふ
所の數のごときは、吾又知らざるなり。噫、顔子の不

幸、冉に斯の疾有り、尼父^か常て深く之を歎ぜり。若し
其の自ら恨む所を反求せば、則ち吾亦た之れ有り。定
めて此に因るを知らざらんや。吾故人に遇へば、則ち
自ら匿す所無きなり。吾常に之を記す。南陽の郊外に
於いて嘗て一孀婦に私す。其の家竊かに之を知り、常
に我を害する心有り。孀婦は是に由りて再び合ふを得
ず。吾因りて風に乘じて火を縱ち、一家數人尽く之を
焚殺して去る。此を恨みと爲すのみ。」と。

かつて李徴が人間であつた頃、私通していた寡婦との逢
瀬をその家族に邪魔だてされた腹いせに、火を放つて家族
全員を焼き殺したというこの告白は、李徴が虎となつた原
因を因果応報によつて説明しようとするものであるが、必
ずしも全体のストーリーの展開と有機的に関わっている
とはいへなく、取つて付けたような感があるのは否めない。

では、このような因果応報による説明のない「李徴」に
おいては、虎となつた理由はどこに求められるのであろう
か。そこで注目されるのは、李徴が虎になる前の様子が「忽
被疾發狂。（忽ち疾を被りて發狂す）」と記されている点
である。というものの、人間が虎と化す話の中には、「李徴」
以外にも「後忽發狂、變爲虎。（後忽ち發狂し、變じて虎
と爲る。）」（『齊諧記』師道宣、『太平広記』卷四二六）や

「忽如狂、奄失其所。（忽ち狂せるがごとく、奄ち其の所を失ふ。）」（『異苑』鄭襲、同前）のような記述が見えているからである。

このように、人間が虎に化す説話が、「如狂」「発狂」の表現を伴って記述されることに關しては、乾一夫に興味深い説がある。⁽⁴⁾ 乾はこうした話の生まれる基盤に精霊憑きの民族信仰の存在を想定し、先の「忽被疾發狂」といった記述は、動物の精霊に憑かれて精神異常を起こした状態を語ったものと考えているのである。今、この説に従うならば、「李徴」に「忽被疾發狂」とあるのみで、虎となった原因に觸れていないのも容易に諒解されよう。動物の精霊憑依の民俗信仰が共有されている社会にあつては、「忽被疾發狂」の記述が精霊憑依による転化を物語っているのであつて、虎になった原因をことさらに因果応報によって説明する必要などなかったのである。先に掲げた二例のうち、『齊諧記』を出典とする「師道宣」にも虎と化した原因の記述は見られなかったが、これも同一の理由からであろうと考えられる。⁽⁵⁾

ところが、時代が下つて人々の共有していたそのような民俗信仰の記憶がしだいに忘れ去られると、「忽被疾發狂」の記述の持つ意味合いも正確には理解されなくなつて

しまう。そこで、新たに虎に化したことの理由付けが必要となり、因果応報による説明が加筆されることとなつたのではなかったか。このように考えると、Vの部分の加筆は、物語を生み出す基盤となつた世界観——精霊憑きの民俗信仰が人々の間にまだ息づいていた六朝から唐代にかけての世界観を、今かりに中世的世界観と呼ぶならば、そうした中世的世界観——の喪失によつて、物語世界が変質したことを物語っているといえるかもしれない。

むすび

以上、「李徴」と「人虎伝」の本文における異同部分について聊かの考察を試みた。それによつて確認し得たのは、次の諸点であつた。

①「人虎伝」は、袁孝の發話を大幅に加筆することで、誠実で友情に厚い袁孝の人物造型をより際立たせている。……Ⅰ・Ⅲ

②「人虎伝」は、「李徴」に比して叙述が整序され、生彩を放つ細部の描写も加えられて、小説的興趣を高めている。そうした「人虎伝」の本文の生成に当たっては、先行する説話群が取り込まれている痕跡が認められた。……Ⅱ

③「人虎伝」では、李徴の内面を吐露した即興の詩を挿入することで抒情性を高め、発言の配列を変えて新たな場面を加えるなどの本文操作を行うことで、物語の後半を起伏に富んだものになっている。……IV・VI

④「人虎伝」の、虎となった原因を因果応報によつて説明するくだりは、動物の精霊憑依という民俗信仰の記憶が人々から忘れ去られた結果、新たな理由づけが必要となつて加筆されたものと推測される。……V

このように見てくると、「人虎伝」は「李徴」にない話柄を加えることで、より豊かな物語性を持った小説へと成熟の度を増していったのだといえよう。のみならず、小説を生み出す基盤となつた世界観の点においてもまた、「李徴」と「人虎伝」の間には大きな径庭が存していると考えられた。ことさらに「李徴」の変容などと題した所以である。

注

(1)『古今説海』と『唐人説薈』(『唐代叢書』)では、主人公と旧友の名前に相違がある。前者が「李徴」と「李儼」なのに對し、後者は『太平広記』と同じく「李徴」「袁慘」となっている。しかし、本文に関しては、若干の文字の異同

を除いて同じである。

(2) 今村与志雄訳『唐宋伝奇集』下(岩波文庫、一九八八)所収「李徴が虎に变身した話―李徴―」の訳注三五を参照。また、近藤春雄『唐代小説の研究』(笠間書院、一九七八)も『太平広記』と『古今説海』の本文を比較し、後者に繰り返しが多く見られることに注目して、話本との関連を指摘している(第三章 作品研究、第五節 主要作品について、丙 神怪小説、10 人虎伝)。

(3) 近藤春雄、注(2) 前掲書、四〇五―四〇六頁。近藤が「李徴」と比較しているのは『古今説海』所収の「人虎伝」であるが、本文に関しては『唐人説薈』(『唐代叢書』)と同じである。なお、近藤は言及していないが、「人虎伝」の1の加筆部分は、あるいは「李徴」のこの文を改変して生み出されたものではあるまいか。

(4) 内田泉之助・乾一夫『唐代伝奇』(新釈漢文大系・明治書院、一九七二)所収「人虎伝」の「解説」および「余説」を参照。

(5) もう一つの例である『異苑』所収「鄭襲」では、虎となつた原因は「社公」(土地神)によつて虎の皮を着せられたためとしており、やはり民俗信仰が基盤となっていることが窺われる。また、梁・任昉『述異記』には、南康の營民伍考之なる者が、大社の樹上に懷孕した猴を見つけ、殺して腹を割いたという話が見える(『太平御覧』卷九一〇「獸部二二・猴」所引)。その後半部には「是夜夢見一人稱神

以殺猴責讓之。後考之病經旬、初如狂、因漸化爲虎。毛鬣爪牙悉生、音聲亦變、遂逸走入山、永失蹤迹。(是の夜夢に一人の神と称するを見るに、猴を殺すを以て之を責讓す。後考之病みて旬を経、初めは狂せるがごとく、因りて漸く化して虎と爲る。毛鬣〔鬚?〕爪牙悉く生じ、音聲も亦た變じ、遂に逸走して山に入り、永く蹤迹を失ふ。)」とあり、これなどは因果応報によって虎となった原因が説明されていて、その点で「人虎伝」に通じるとも見なし得るが、ここで注意すべきは、考之に罰を下す存在としての「神」への言及が見えることである。ここにも民俗信仰を背景にした中世的世界観が示されていると考えられる。なお、以上はいずれも六朝期の志怪小説の例であるが、唐代の小説でも、先に瞥見した『原化記』所収「南陽士人」には、虎となった主人公が、柴を荷って通りかかった人を襲おうとした刹那、「取る莫かれ、取る莫かれ。」と制止する「鬚眉皓白」の老人の姿をした「神人」が登場している。唐代にあつてもなお民俗信仰を背景とした中世的世界観が残存していた痕跡と認められよう。

(聖徳大学短期大学部)